

翁久允と富山

— 『高志人』で目指した郷土研究

水野 真理子

一、はじめに

作家、ジャーナリスト、画家、宗教家とさまざまな顔を持つ翁久允（一八八八—一九七三）は、富山の偉大な文化人である。翁は幅広い功績を有しているが、その中で、『高志人』を創刊し、一九七三年までの三八年間、雑誌を発行し続け、郷土の文化研究を広めようとした点は、彼の富山における最大の貢献だと言えよう。『高志人』は、一九三〇年代から一九七〇年代までの富山を中心とする文化的事象や、文化人たちの人脈やネットワーク、活動に関する情報の宝庫である。近年では、吉井勇と翁の関係^一、越中八尾民謡おわら保存会（以下、おわら保存会）との関わりや翁の果たした役割などの研究も進み^二、翁が富山と東京を往復しながら郷土研究に力を注いだその

時期の活動について、光が当てられ始めている。それらの研究に続き、膨大な情報量を有する『高志人』研究を、今後よりいっそう進めていかなければいけないだろう。そこで、本稿では『高志人』研究の出発点として、まず『高志人』創刊時から紐解いていきたい。創刊までの経緯や意図、また郷土研究として具体的には何を目指していたのか、これらの問題について考察する。

二、『高志人』創刊に至るまで^三

二一、国境を越えた翁の移動の軌跡

翁の人生は、富山から首都東京へ、そして西欧文化を体現するアメリカに渡り、さらにはアジア文化の源の一つでもあるインドを訪問、最終的には富山に回帰するという、国境を越えた移動を伴う多彩さを持っていた。その経歴は、西洋哲学由来の「コスモポリタン」思想や現代において言及される「世界市民」概念に見られるように、世界規模で人類を捉えるという普遍的な側面も持ちながら、一地方から派生している翁独特の観念である「世

界人」「コスモポリタン（宇宙人）」思想を形作った。そして、その理念は『高志人』を発表媒体とした郷土研究の発案につながっていく。そこで、まず『高志人』を創刊する一九三六年までの翁の半生を辿っておこう。

翁は一八八八（明治二二）年二月八日、富山県上新川郡東谷村大字六郎谷村（現中新川郡立山町六郎谷）に生まれ、その後、一九〇二（明治三五）年四月、富山県立富山中学校（現富山県立富山高等学校）に入学する。しかし、一九〇五（明治三八）年一月、友人たちと寮の舎監に対して行き過ぎた悪戯を行ったことにより、放校処分を受け、人生で最初の挫折を味わうことになる。父の計らいで、進学の道を模索し、縁戚を頼って上京するが、当時の若者たちの間で流行していた、いわゆる渡米熱の中で、翁も文明国アメリカへの憧れと自分の将来への希望を抱き、アメリカ行きを決意する。一九〇七（明治四〇）年一九歳のときであった。

その後、翁は一九〇七年から一九二四（大正一三）年まで、約一七年間、アメリカのワシントン州シアトルやカリフォルニア州スタクトン、オークランドに居住し、新聞記者、移民地文芸作家としてのキャリアを積んでい

く。青少年期とほぼ同じ年月をアメリカで過ごした翁にとつて、アメリカはまるで第二の故郷のようになっていった。

その後、三六歳、一九二四年の三月、父の病状を慮り、家族とともに日本に帰国し、東京朝日新聞社に勤務する。一七年前とは様変わりした日本の都市の様子や、慣れ親しんだアメリカとの文化的差異にとまどいながらも、『週刊朝日』の編集を担当し、文人との交流も深めていった。また、アメリカ時代に執筆した作品を改作して発表し、日本文壇の中で、遅咲きながら実力派の異色な小説家として注目されていった。

一九三一（昭和六）年、四三歳のとき、友人の画家、竹久夢二の再起をはかるため、また小説の素材を集めるために、朝日新聞社を退職して再渡米する。当初はまず二人でハワイとアメリカを訪れ、夢二の描いた絵を、翁の在米時代の友人、知人などに購入してもらおうことで、その後の経済的資金を作り、そして夢二の憧れていたフランスへと、世界漫遊旅行を実行する予定であった。しかし、滞米中に夢二との関係が決裂し、翁は一九三二（昭和七）年四月、一人で帰国した。その後、インド仏跡を

訪問したいという念願を叶えるために、一九三三（昭和八）年一月、上海、香港、シンガポール、ラングーンを経て渡印した。ノーベル文学賞受賞者のラビンドラナート・タゴールにも面会し、仏跡を巡礼して、東洋の文化について思いを馳せる。そして三か月後の四月、東京に戻った。

このように西欧文化を体現するアメリカ、そしてアジア文化の源泉の一つでもあるインドを訪問したことで、日本文化とは何か、そして日本の文化的位置がどこにあるのかを翁はより真剣に考えるようになった。その経験もまた、翁が郷土研究に関心を寄せる重要な素地となったのである。

インド旅行より東京に戻った翁は、一九三四（昭和九）年、東京の大森区鶴木（現大田区）に家を新築する。翌年、東京汽船会社専務の林甚之丞より伊豆大島の三原山行者窟の紹介のため、現地視察の依頼を受けた。当時、正力松太郎が社長を務める読売新聞が、三原山を取り上げたことで、三原山が注目を集めていたという。読売新聞による宣伝が三原山観光を促し、東京汽船会社の利益につながるため、林と正力との間で三原山観光へ力を入

れることに合意がなされた。こうした背景のもと、翁は林を通じて視察を依頼された。伊豆大島を巡った後、よりいつそう役行者を知るため、役行者の道場だった奈良県大峰山での修行を敢行する。

役行者を主とした山岳仏教研究に加え、日本の神社仏閣や日本史の研究に打ち込み過ぎたこと、また次第に軍部の力が強くなつていく不安定な世相や、作品を売り続けていかなければ生計が立たない作家という職業に対する不安などのために、創作に集中できず、翁は体調不良となる。そこで、一九三六（昭和一一）年、四八歳のとき、静養のため、妻清子の兄石黒孝次郎が肥料商をしている岐阜県高山市へ向かう。そこで、石黒家と懇意にしていたという郷土研究家の福田夕咲（ゆうさく一八八六—一九四八）と、福田とともに郷土研究を盛り立てていた小説家江馬修（なかし二八八九—一九七五）と知り合ったことで、郷土研究誌創刊の構想が現実化していくのである。

二二二、郷土研究誌創刊の背景

以上のように、翁の人生の軌跡を辿り、郷土研究誌創

刊に行きつくところまでは確認した。それでは、さらに具体的に、どのような背景で翁は郷土研究誌創刊を實行していったのだろうか。この辺りの事情について、知りうる限りで記してみた。

まず翁に重要な影響を与えたと思われる福田について見てみよう。彼は岐阜県高山町大新町（現高山市）出身で早稲田大学文学部在学中から詩を発表し、大学卒業後は読売新聞社に入社、文芸欄を担当した。一九一〇（明治四三）年には詩集『花のゆめ』を刊行している。一九一三（大正二）年に退職し、翌年、家庭の事情で高山に戻り、家業の漆器問屋や魚市場役員などの仕事で生計を立てる。そのかわら、詩社や短歌会を結成し、民謡研究に力を注いで、郷土文化の高揚に貢献した人物である^四。江馬とともに雑誌『ひだびと』で活躍している。

『ひだびと』は、江馬が一九三三年に創立した飛騨考古学会の機関紙『会報』（一号～二年一号）（一九三三年四月～一九三四年一月）、『石冠』（二年二号～二年四号）（一九三四年五月～一〇月）の後継雑誌であり^五、三年一号（一九三五年一月）から二年五号（一九四四年五月）まで継続した。三年一号の『ひだびと』によると、編集

者は川上六兵衛、発行所は飛騨考古土俗学会となっている。また編集後記には、東京在住だった江馬が、再び飛騨に居を構えたことを機に、『ひだびと』の編集に専心してもらったことになったと記載されている^六。

この江馬であるが、彼も郷土研究について翁にかなりの影響を与えた人物である。江馬は岐阜県高山市生まれ、一九〇六（明治三九）年に斐太中学校を中退後、上京し、田山花袋の書生となり、その後高山で代用教員となった。その後、再び上京して、神田区役所の臨時雇い、水道局製図係などの職につきながら小説を書いた。一九一一（明治四四）年「酒」（『早稲田文学』掲載）で小説家デビューした。一九一六（大正五）年、長篇『受難者』を出版し、一九二六（昭和元）年にはヨーロッパに渡り、帰国後はプロレタリア作家として活躍している。特別高等警察に逮捕、留置されるといふ苦しい経験も経た後、一九三四（昭和九）年に高山へ戻る^七。帰郷後、郷土研究に力を入れ始めたようである。翁の一九三八年の『高志人』三巻四号に掲載された回想によると、一九三五年の冬、高山に滞在していた折に、江馬は翁に対して「長野県に『信濃』新潟県に『高志路』の郷土研究誌があるが、富

山県にも石川県にもそれが無い。北飛驒を研究しやうとすれば、どうしても、越中、能登、加賀にゆかねばならぬ。それで、どうです君も一つ越中で研究誌を出しませんか、とケシかけて来た」¹⁸という。

福田や江馬が郷土の研究に注力したり、郷土を舞台とした創作を行ったりしたことは、民俗学研究の広まりとも関わっているように思われる。民俗学とは、農民や民衆など一般庶民の文化がどのように作り上げられ、発展してきたかを民俗資料にもとづいて研究する学問である¹⁹。柳田國男の活躍によつて飛躍し、学問として確立された²⁰。柳田は明治三八年頃から民俗学的発想が文章に表れるようになったと言われているが、その後約五十余年にわたり、柳田は民俗学を追及していく。翁が飛驒を訪れていた一九三〇年代半ば頃は、柳田の民俗学確立期とされている時期と重なっている。柳田は一九三四年には日本民俗学の初の概説書と言われる『郷土生活の研究法』『民間伝承論』を出版しており、さらに一九三四年から数年にかけて門下生を動員し、全国各地における大規模な民俗調査を行い、後継の研究者育成にも力を注いでいたようである。柳田のこうした動きからも一九三〇年

代半ばには、民俗学研究が全国的にも広まりつつあったのではないかと考えられる²¹。

そして、一九三五年の冬、飛驒での静養を終え、翁は飛驒から富山への文化的経路を辿りたいという思いのもと、白川郷から庄川に沿って進み、五箇山から城端に出て、そこから郷土研究の端緒を探りつつ、富山市内に入ろうと考えた。ところが大雪のため、その五箇山踏破は断念し、数日後、高山線で富山へ入ることとした。そして以前おわら保存会創立の際（一九二九年八月）に招かれた八尾に立ち寄った。そこで知人の川崎順二（一八九八—一九七二）、清水徳義、木村彦蔵と会い、彼らと民族や郷土について語り合ったという。また松本駒次郎（一八六〇—一九四九）の『八尾史談』なども入手し、翁の郷土研究への熱意は高まっていた²²。

ここからもわかるように、八尾にもすでに郷土文化に関心を持ち、独自に研究する人々がいたようだ。その中心的人物の一人が川崎である。川崎は八尾町東町に、代々医業と薬舗を営む由緒ある旧家に長男として生まれる。金沢医学専門学校で学び、自宅にて開業し医療に専念した。医学の道だけでなく、書画や漢詩を趣味とし、また

歌舞伎や文楽に心酔するなど文化に造詣が深かったという。おわら保存会の初代会長となり、生涯、おわら節の発展、保存に力を尽くした^{二〇}。翁が八尾の川崎のもとを訪れた一九三五年頃は、おわら保存会は創立後、約六年経ち、歌詞集『おわらぶし』の発行、漆器類、木工品などおわら節にちなんだ製品の制作や販売を行っていた。また懸賞付きで新作のおわら歌詞を募集し、さらには、大集団でのおわら節踊りを実施するなど積極的におわら節文化の発展と保存のために、保存会が活動していた時期であった^{二四}。そうした活発な郷土文化保全の動きが、翁の郷土研究への関心に拍車をかけたと考えられる。

また翁が手にしたという松本駒次郎の著書『八尾史談』も、八尾町に見られた郷土研究を象徴するものであろう。松本は一八六〇年、八尾町東町で、種油、紙、小間物商を営む松本家の次男として生まれた。勉学を好み苦学の末、小学校教員となる。一九〇〇（明治三三）年、八尾小学校在任中に、郷土読本『八尾郷土史談』の編纂委員となり、これが後の八尾史編纂につながっていった。そして、一九二二（大正一〇）年頃から念願だった『八尾史談』の編纂に着手し、膨大な編纂作業を独力で取り組

み、一九二七（昭和二）年一月、『八尾史談』が完成したという。翁がその大著を手にしたのは、完成後おおよそ十年が経とうとする頃であり、八尾を理解するための重要文献として、『八尾史談』は地元の人々によって重宝されていたことだろうと想像される^{二五}。

このように高山、八尾の郷土研究家たちとの交流を経て郷土誌発行の意思を固めた翁は、富山に戻って、「第一番に図書館をたづね、越中研究に関する書籍とその系列を一通り菊森永造氏や増山茂治氏などから知らしてもらった」^{二六}という。

その後、一九三六年には柳田國男と面会し、郷土研究誌を発行する旨を告げ、相談している。朝日新聞論説員であった柳田とは、翁が『週刊朝日』の編集を担当していた時期から親交があり、柳田から雑誌『郷土研究』（一九一三年創刊）『民族』（一九二五年創刊）を受け取り、民俗学について教えられたという^{二七}。また、一九二八（昭和三）年の六月に、箱根湯本に建設された「花の茶屋」別館で、『文藝道』主宰の須藤鐘一が世話役となって宴席が催された。その会に翁は柳田とともに参加している^{二八}。柳田の存在も、郷土研究へ向かう翁の背中を力強く後押

ししたのであろう。

郷土研究誌創刊の意図を聞いた柳田はそれに賛同し、射水郡小杉町の漢詩人片口安太郎（江東（一八七二—一九六七）を紹介したという。片口もまた富山の郷土文化と関わりの深い人物である。片口は射水郡戸破村（現射水市小杉）に、味噌醬油を製造する老舗の家に生まれた。幼少期より読書好きで中学校進学を望んだが、家業を継ぐことを父より切望され、進学を断念している。十代の頃と思われるが、小杉町に滞在していた漢詩人、木蘇岐山が創立した漢詩結社「月三吟社」がつさんぎんやに参加し、漢詩の創作に励んだという。叔父の藻谷海東や、大橋二水、岡崎籃田とともに、越中漢詩壇の隆盛期を築いたと言われている。また、一九一九（大正八）年に小杉町長に就任し、一期目は一九二三（大正一二）年まで、その後一九二六（大正一五）年に再選、一九三〇（昭和五）年まで任期を全うした。小杉図書館や郡立農業公民学校（現小杉高校）の創立（一九一九年）に尽力し、教育振興に力を注いでいる。また小杉貯金銀行（のちの小杉銀行）を創設し（一九〇〇年）、町の産業発展にも尽力した人物である^{一七}。翁が片口に会った際、片口は六四歳、小杉町の町政、産業、

教育、そして漢詩をはじめとする文学の分野での実力者として著名な存在であった。

こうして、七月下旬、翁は『高志人』創刊の趣意書を二百人程の知人らに送り、賛意を得て、そして九月二〇日、郷土研究誌『高志人』を創刊した。郷土研究家の福田や江馬、八尾のおわら保存会の活動、川崎や松本による郷土文化保全の活動、そして片口との出会いが象徴する、一九三〇年代半ばの民俗学の広まりや郷土文化研究の機運が『高志人』創刊を導いたと言えよう。

さらに、創刊号には祝辞が寄せられており、『高志人』創刊に賛同した文化人のほかに郷土研究団体からの言葉や、郷土研究の現況などの説明が掲載されている。そこには、富山郷土研究会、高岡文化会、氷見郷土顕揚会、東岩瀬史談会、明治会（婦負郡杉原）が名を連ねている。その他、伏木方面、新湊、中新川郡、下新川郡の文化研究状況についての記載もある^{一八}。したがって、翁の『高志人』創刊により、それまで県内で個々に研究活動、郷土文化保全活動、創作活動を行っていた小団体や個人が、『高志人』を主軸として、結集することにもなったのではないだろうか。その点もまず『高志人』が果たした大

きな役割だと考えられよう。

三、『高志人』で目指した郷土研究とは

三十一、理論的根拠―「高志人発行について」より

『高志人』が郷土研究を目指すものであることは、明白ではあるが、さらに踏み込んで考察してみたい。郷土研究を行うことで、翁は何を成し遂げようと思つて書いたのだろうか。また、どのような背景から、その考えに至るようになったのだろうか。それらについて『高志人』創刊号の翁の言葉から探ってみよう。

創刊号には、一九三六年七月下旬に知人たちに送った「趣意書」が「高志人発行について」という題で掲載されており、そこには『高志人』創刊に至る経緯や目的などが具体的に記されている。「御あいさつ」「動機」「海外放浪の体験」「郷土愛と国体明徴」「日本精神の完成へ」「お願ひ」と五節に分けて説明している。

まず翁は「動機」の節で、自身の境遇に触れて郷土誌発行の動機を述べる。彼が郷里や日本を離れたことで感

じてきた空虚さ、そして世界主義の理想をもってアメリカへ渡ったが、実際に世界大戦後の世界情勢を眺めてみると、各自の国家への偏狭なナショナリズムは高まるばかりであり、世界平和の理念に対して幻滅を感じたことを記している。そして次のように述べている。

そこで私は今まで、譬へて言つたら望遠鏡をもつて、遠い世界ばかりをながめ、その世界へ一歩一歩近^{マツ}かうとしてゐたのが、その憧がれの美はしい世界の破滅に依つて、望遠鏡を捨て、今度は顕微鏡を覗かうと言ふ気持ちに變つて来たのでありました。つまり世界人よりも日本人、そして日本人たるには第一に越中人と言ふことでした。第一に村の人となり、そして県の人となり、国の人となつてこそ人は初めて世界の人となるのだと言ふことを初めて覺つたわけであります(四〇頁)。

ここに翁の「世界人」の理念が表れている。翁は「米國よりの感想(全一二回)」「富山日報」一九二四年一月一日(一四日)において、初めて「世界人」の理念につい

て記したが、その理念とは、各自が持つ出自や民族的特徴を堅持することによって、多様な文化、民族がひしめき合う世界の中で、排他的な観念を持たずに、活躍することが出来る人物を目指すものであった。世界人となるためには、自分の生まれ育った故郷という母体をより深く知る必要があると考え、それを実践するために、郷土誌の発行に行きついたのであった。

その「世界人」の理想に加えて、翁は日本の文化的特徴はいつたい何かという点にも思い至っている。本稿の第一節で翁の経歴を振り返ったが、「海外放浪の体験」の節にその経歴が記され、またその意義を翁は総括している。まず在米経歴を経て日本に戻ってきたとき、日本の国民生活全体の欧米化を目の当たりにしたこと、さらに中国から南洋を通じてインドに渡った経歴から世界人類の半数以上も占めるアジア大陸が、欧米人に征服されているという現状を痛感したことに触れている。当時の翁は、欧米人に支配され亡国民と化しているアジア大陸の各国民と日本を比べれば、日本はいまだその支配と征服からは幸運にも免れているという見解を持っていたようだ。「私は到るところで、まるで餓鬼のやうにやせこけた

眼ばかり光つてゐる人達から、激しい語調で東洋人の為めの東洋論をきかされ、また東洋の救世主としての輝ける日本讚美の声をきかされました。」(四二—四三頁)と述べているように、西欧諸国に凌駕された東洋を救うために、日本人が担うべき役割を考えるようになったと記している。

続けて、「郷土愛と国体明徴」の節では、その日本人の果たすべき役割について思想的な側面から説明する。欧米化によって、日本伝統の精神は消滅したかのように翁の目には映った。しかし、東洋の文化的伝統を持ちながら、その一方、西洋化の推進にかなり成功している日本民族には、特殊な使命があるのでないかと考える。今の時代は、「東西両洋の思想が混乱迷合」しており、しかしこれは、「新しい時代を産み出さう為めの陣痛期だ」(四三頁)と言う。そうした時代の流れにおいて、日本の伝統的な生活や思想の中にも消滅していくものがあることはやむを得ないが、日本民族の使命としては、「一方には徹底的に欧米諸民族の研究を遂げ、そしてうちには熱烈な郷土研究を果たさねばならぬこと」「この二つの研究が調和されたところに、東西両洋の思想統一があり、

新らしい日本精神の発現がある」(四四頁)と主張している。

この翁の主張には、一九三〇年代に見られた、東洋対西洋という二項対立的に文化や世界構造を把握する傾向が表れている。在米日本人社会においても、二世世代に東西文化の融和として、日米文化の懸け橋的役割を期待する声が高まっていた^{三〇}。在米経験の長かった翁も、日本人に、東西文化の橋渡しの役割を見出そうとしている

点が非常に興味深い。相反しながら混乱する西洋と東洋の思想が、うまく統一されたものとして、日本の新たな思想を生み出すためには、まず、日本民族の研究や各地の郷土研究から始めることが必須だと翁は確信した。

翁の論理には、西洋と東洋の思想の統一という融和的な側面が見られるが、その一方で、西欧文化、思想に對峙できるような日本思想の確立を目指すという、一見すると相矛盾するような主張も存在している。それは「日本精神の完成へ」の節に記されており、ここでは、翁の感じる、日本精神の欧米化への危機感とともに、西欧思想に對等に渡り合えるような日本精神を生み出すことの必要性が述べられている。そして、その方向性を定める

のが郷土研究であると言う。

郷土を愛する心はやがて郷土の精神を作り出すものであり、それら郷土の精神を総合したものの、所謂日本精神となつてゆくわけですが、私達の目ざす日本精神は更らに全世界、全人類に発揚してゆくべき精神であります(四六頁)。

ここでは郷土の精神を総合化したものが日本精神となり、全世界に向けて主張していくべきものとなるという壮大な希望を掲げている。しかし、現状ではまだ具体的にそれがどのような精神なのかはわからないようである。今後、その精神を見出し、作り上げることを目指し、翁は「その偉大なる精神完成への一細胞に過ぎないこの郷土研究の為に」(四七頁)努力を重ねていきたいとその使命を述べる。

三二二、郷土研究の内容

以上のように、「高志人発行について」の記述から、『高

志人』において、翁は郷土研究を総合した日本精神の醸成を目標にしていたことが明白となった。次に、その郷土研究の内容について、引き続き『高志人』創刊号を手がかりに詳しく見てみよう。『高志人』を発表の場としてなされるべき研究とは、「(1) 史前・史後の研究 (2) 考古学的研究 (3) 民俗土俗学的研究 (4) 伝説及び伝承の研究 (5) 人物研究 (6) 遺跡、古墳、神社、寺院、方言、家伝、諸記録等の研究」(四八頁)と記されている。

これらを見てみると、歴史、考古学、民俗学、伝説や人物、伝統的な文化的建造物、方言の発掘と再評価、その保存など、かなり幅広い文化的内容を視野に入れていることがわかる。

また掲載された論稿もかなり学術的であり、『高志人』の研究雑誌という性格が色濃く表れている。例えば創刊号には、富山の古代史に焦点を当てた早川莊作「越中の史前時代考察」、また民謡がどのように歌い継がれたかの変遷を考察した藤田健次「俗謡変遷の推定説(一)」などがある。さらには郷倉千靱の「小杉焼について」や小柴直矩「富山浄瑠璃」など文化、文芸に着目した論稿もある。

それでは翁はどのような論稿を寄せたのであろうか。

創刊号には「役行者と非常時代」を寄稿し、役行者の活躍やその時代を振り返っている¹³⁾。これはもともと別の雑誌に投稿する予定のものであったが、雑誌発行の都合上、急ぎよ創刊号に掲載することにしたという。この論稿についてはまた稿を改めたいと思うが、郷土研究として翁が寄稿したものとしては、「東谷の伝説と考察」(『高志人』第二巻一号(一九三七年一月)に着目したい。この論稿は連載を予定しており、まず第一回目では、郷里の東谷を再検討することを意図していたが、編集の都合上間に合わなかったため、翁の幼少時代の回想で始めると記してある。日本精神を探るための郷土研究の端緒として、翁はまず自らの故郷、東谷を出発点とした。

この論稿では、「不動様とガメの化身」などの言い伝えや、六郎谷よりもさらに南の、目桑、伊勢屋、小又、松倉、座主坊、長倉、城前に居住していた人々の特徴なども回想している。翁はこのように、村の口述伝承や、古くから住んでいる人々の来歴を知ることが、翁たち自身を知ることになり、それは翻って日本人を知ることでもあると考えたようである。

三十三、日本民族の精神とは何か

以上のように翁は、日本精神とは何かを、郷土研究を通して見出す目的に向かつて漕ぎ出した。『高志人』の発行を通じてそれは次第に発見されていくものではあつたが、翁自身はその日本精神について、何か見通しのようなものには有していたのだろうか。

『高志人』第二巻二号掲載の「二月の言葉」（一九三七年二月）を見てみよう^{三四}。翁は郷土研究の意味を、大河の流れを比喩に次のように記述している。

人生は河である。流れくゞて遂には大海に落ちるのだ。その大海が千変千化して無数の河を作る。

私達は、人類生活の河の流れを溯つて行つても、下つても遂には海に帰へるのである。

郷土研究は、現在私達が立つてる人生の上流か中流かの瀬や淵から源流をふりかへり、更らに溯つてゆかうとする姿である。それは中流以下の流れを清めん為め、即ち明日からの人生を明朗ならしめん為め、昨日までの、更らに昨年までの、更

にくゞその前を究めやうとする努力である（二頁）。

ここで翁は、人生を河に例え、下流の流れを清めるために、それは言つてみれば、未来をよりよく生きるために、自分たちの来し方、源流を辿つてみる、それこそが郷土研究であると述べている。続けて次のように説明する。

ともかくも、私達は人生の川を遡つてゆくと、最後の一滴の露につきあたるのだ。その一滴づゝの露の集りが大河を形成しているのだ。神通川も揚子江も、恒河も、ダニユヴも、ミシシッピもそれら露滴の集りである。私達が高志の国を知ることが日本を知ることであり、亜細亜を知ることであり、欧州を知ることであり、そして全世界を知ることだ。それは一滴の露はどこも一つだからである（三頁）。

ここでは、各個人の人生としての河を意味するだけでなく、各民族の文化の変遷というものを大河として捉えている。そしてそれらの大河が、最後に行き着くところは

一滴の露であると言うが、これはおそらく様々な文化の一つの源のことを指しているのであろう。その一つ一つの露から各地域、各国家の文化が出来上がり、それらの露の集まり全体が、世界を形作っているという。翁独特の世界観、文化観がここでも示されている。富山県民が高志の国の源流を知るということは、露の集合体である日本文化を知ることになり、ひいては各国家の露である文化と、その露からなる大河の集合体である世界の文化を知ることにつながるという論理である。この大河の比喩と世界観は、各自の出自の文化的特徴を尊重しながら、世界で活躍する人物を指すという「世界人」の思想と相通じる側面がある。

さらに続けて翁は、日本の源流がいったい何であるかを述べていく。

日本民族の源流の一滴露であつたところの神々。それらの神々は木の葉から落ちて流の中に合同してゆくうちに、もとの露が水となつて来た。そこに神々の進化があつた。変化もあつた。そのうちに他の支流が流れ込んで来た、更に他からの支流

が滔々とやつて来た。国つ神の露滴、天つ神の露滴、それらの合流が形造つた原始神道の中に、流れ込んで来た。伝教、道教、仏教、景教、其他あらゆる類を異にした支流であつた。日本の川はそのやうにして三千年間流れて来たのだ。その間に神々の姿が變つたと同じく民族の生活も精神も變つた。その混淆した流れの中に、私達は清純なる流れの源流を辿らうとする（三頁）。

ここで翁は、日本民族の源流として、原始神道への高い関心を示している。日本の古来からの宗教である神道に日本精神の源泉があると見通しをつけることは、ある意味自然な流れではあろう。著名な先人の研究者たちでも、例えば国学者の本居宣長も神道研究に力を注ぎ、また文学者のラフカディオ・ハーンも日本の精神構造の中に、神道にもとづく祖先崇拜を見出している。翁も同様に神道に着目しながらも、その研究フィールドを彼の故郷である東谷から出発しようとしている。こうして、翁はその後、「東谷の伝説とその考察」として、東谷の氏神様とその正体・氏神と部落の源流について、連載形式で論稿

を発表していくのである。

四、おわりに

以上見てきたように、翁の『高志人』創刊の背後には、彼の国境を越えた移動経験が生み出した「世界人」の思想や、また一九三〇年代の民俗学や郷土研究の隆盛という背景があった。また翁は、郷土研究を通して発見していくべき日本精神の源泉を、神道研究に求めていったのだが、さらにその神道研究を故郷東谷村を出発点として、考察を始めた。翁が「東谷の伝説とその考察」を中心に、その後どのようにして彼の神道理解を深めていくのか、またそれは翁の既刊の様々な著作、特に仏教関連の著作などを踏まえると、どのような思想的発展がみられるのか、それらの点を今後考察していきたい。そして、翁の目指した郷土研究の具体像、究明したいと目標に掲げていた日本精神が、どのようなものなのかを鮮明にしていきたい。その一方、この『高志人』をめぐる郷土を中心とした文化人たちのネットワークについても、十分に目配りしていく必要がある。富山の郷土研究、文化研究

の情報の宝庫である『高志人』研究に、本稿が一石を投じられれば幸いである。

注

- 一 細川光洋『吉井勇の戦中疎開日記(上)―「北陸日記抄」』『国際関係・比較文化研究』第一六巻第二号、二〇一八年三月、細川光洋『吉井勇と高志びとたち―戦中日記より 第二回 翁久允』『北日本新聞』二〇一八年八月二三日。
- 二 長尾洋子『越中おわら風の盆の空間誌―「歌の町」からみた近代』(ミネルヴァ書房、二〇一九)。
- 三 翁の経歴については、逸見久美・須田満編『翁久允年譜―一八八八―一九七三(第三版)』(翁久允財団、二〇二〇)、翁久允他編『翁久允全集(全十巻)』(翁久允全集刊行会、一九七二―一九七三)を参照した。
- 四 日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大辞典』(小学館、一九七七)、一六〇頁、『二〇世紀日本人名辞典』(中外アソシエーツ、二〇〇四)。
- 五 江馬修『「作家の歩み」(理論社、一九五七)、二二―二五頁、天児直美『炎の燃えつきる時―江馬修の生涯』(春秋社、一九八五)、二九一頁。なお『会報』一号の発行月が、表紙には「昭和八年五月二十五日」とあったが、ここでは奥付に記載の「昭和八年四月

二十五日」の方で記した。

六 『ひだびと』三年一号、飛騨考古土俗学会、一九三五年一月。

七 日本近代文学館・小田切、『日本近代文学大辞典』、二三三―二三

三頁、江馬、『二作家の歩み』天児、『炎の燃えつきる時』、二八
六―二九六頁。

八 『高志人』三巻四号、一九三八年四月、三頁。

九 『日本大百科全書（電子版）』（小学館、二〇一四）、新谷尚紀『民
俗学とは何か―柳田・折口・渋沢に学び直す』（吉川弘文館、二〇
一一）。

一〇 柳田の記述に関しては、日本近代文学館・小田切、『日本近代文学
大辞典』、三九七―三九九頁、新谷、『民俗学とは何か』を参照し
た。

一一 江馬も高山で始めた郷土研究の契機について、飛騨の土地柄が民
俗学的にも考古学的にも豊かな資料に恵まれていた点と、柳田国
男の三十年にわたる匿れた民俗の研究が、折から広く世間に認め
られてきて、新しい郷土研究の機運が全国的にみなぎってきたこ
とを挙げている。江馬、『二作家の歩み』、二一七―二一八頁。

一二 『高志人』三巻四号、三―四頁。須田満氏によれば、翁と川崎の
書簡は、一九二九年から一九六五年までに亘り、現在八十七通確
認されている。『高志人』創刊前後の手紙のやり取りからも、川崎
のおわら保存会での活動が翁の郷土研究熱に影響を与えたことが
うかがえる。須田氏より翁と川崎の往復書簡の翻刻原稿を教示頂
き、閲覧させて頂いた。ここに感謝申し上げます。

一三 続八尾町史編纂委員会『続八尾町史』（八尾町役場、一九七三）、

九二―一九三頁。

一四 長尾、『越中おわら風の盆の空間誌』、二二六―二二五頁。

一五 松本の経歴については続八尾町史編纂委員会、『続八尾町史』、八
七五―八八〇頁を参照。また『続八尾町史』には、『同書』八尾
史談』のこと（筆者）は地方における郷土理解の唯一の宝典とし
て珍重され、多くの町民に親しまれた。当時、郡および県下でも
この種の刊行はきわめて僅少であり、貴重な文献のひとつとなっ
た。また、これがきっかけとなって町村における郷土史の編さん
が行われていることからも、『八尾史談』の重要性が推測される。

一六 『高志人』三巻四号、四頁。

一七 翁久允他編『翁久允全集（四）』（翁久允全集刊行会、一九七二年）、
二二六―二二七頁。

一八 逸見・須田、『翁久允年譜』、二〇頁。

一九 『富山大百科事典』（北日本新聞社、一九九四）、三七五頁、『二〇
世紀日本人名辞典』（中外アソシエーツ、二〇〇四）、楠瀬勝彦修
『小杉町史―通史編』（小杉町役場、一九九七）、九五―九五八
頁、稗田董平『小杉と文芸―片口江東、安之助その詩歌と生涯』
（富山近代文芸研究会、一九八二）。

二〇 『高志人』創刊号、一九三六年九月、四九―七八頁。

二一 『高志人』創刊号、三七―四八頁。以下、引用は本文中に頁数の
み記す。また旧漢字は適宜新漢字に改めた。

二三 吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』（日本図書センター、二〇〇五）。

二三 翁久允「役行者と非常時代」『高志人』創刊号、八〇—一〇九頁。

二四 翁久允「二月の言葉」『高志人』第二卷二号、一九三七年二月、二

一—三頁。以下、引用は本文中に頁数のみ記す。また旧漢字は適宜新漢字に改めた。